

『視覚支援学校の体育の授業で ブラインドサッカーを取り入れるための実践的研究』

学籍番号 219507

氏名 村瀬 大輝

主指導教員 正井 隆晶

副指導教員 山本 利和

1. 研究の目的と背景

本研究の主題は、「視覚支援学校でブラインドサッカーを体育の授業に取り入れるための実践的研究」である。そのため、視覚障がい者を対象とする「ブラインドサッカー」を扱う。ブラインドサッカーは、パラリンピックの種目の1つでもあり、障がい者スポーツの1つである。「ブラインドサッカー」は他の視覚障がいスポーツと同様に、感覚を研ぎ澄ませ、声や音、仲間を信じる気持ちを頼りにプレーするといった魅力があるにも関わらず、日本ではほとんど学術研究がなされておらず、一般の人にもあまり知られていない現状がある。また、CiNiiにおける論文検索では、「視覚障がい 支援学校 ブラインドサッカー」のキーワードで7件の論文が提示されるものの、そのすべてが筑波大学附属視覚特別支援学校に関連した論文であり、他の視覚支援学校の体育の授業での実施状況などは不明な点が多い。そこで、本研究では、視覚支援学校でブラインドサッカーを体育の授業で取り入れることを目標に、実習校の課題を把握することからはじめ、具体的な授業の工夫等を検討した。

2. 学校実習における実践内容

実習校では、ブラインドサッカーは授業には取り入れられていなかった。そのため、まずは、その理由や課題を明らかにしていくことが必要と考えた。その上で、実習校で実施可能なブラインドサッカーの授業計画を立案し、研究授業を行っていった。対象は、中高部（実習校では、中学部と高等部が合同の中高部として運営されている）の単一障がいクラスの生徒を対象として、基本学校実習Ⅲでは、①体育の授業の見学を通して、体育の授業の全体像の把握や課題の把握、②体育の授業における生徒の実態把握の方法の理解と実態把握における課題の把握、基本学校実習Ⅳでは、①実習校における体育の授業の指導を通して指導における課題の把握、②ブラインドサッカーの授業について指導教員との検討開始、発展課題実習Ⅲでは、①ブラインドサッカーの授業の実施と運動要素毎の評価方法の検討、発展課題実習Ⅳでは、①フロアサッカーの授業の実施と運動要素毎の評価方法の検討および、授業における展開方法の検討、という流れで実践研究に取り組んだ。以下、発展課題実習ⅢとⅣについて詳細を記す。

発展課題実習Ⅲでは、運動を要素に分解して実態把握に努めた。それは、例えば球技では種目を越えて共通の運動要素があるので、そのような実態把握を心がけることで、継続的な視点で指導していくことが可能となると考えたからである。つまり、種目が別でも共通な運動要素

の苦手を把握することで、種目毎で一から指導するのではなく、継続した観点の元、個別のメニューを取り入れるなどの工夫を行えるようになり、そのことが、ひいては、全体的な運動の向上にもつながると考えたのである。具体的には、対象生徒の実態においては、蹴る動作自体の経験は1名を除いては全く初めてであったものの、ボールを蹴る動作、止める動作を教える際には、運動を要素に分解し、これまでに経験しているフロアバレーでのボールを止める動作、つまり、まず音を聞いてボールの正面に入り、手でレシーブする動作を取り入れる等、違う競技においても共通している動作を意識して指導することで、概ねスムーズに上達することができた。発展課題実習Ⅳでは、前回の運動要素ごとの分解した指導を生かし、動作の説明をする際は、フロアバレーに沿って動きの指導することで生徒たちは理解が早まっていた。そして、「ブラインドサッカー」での取り組みを活かし、応用させ、「フロアバレー」を足で行う、「フロアサッカー」での取り組みへと発展させることができた。この「フロアサッカー」は、全盲プレーヤーと弱視のプレーヤーが融合できるメリットをうまく活かしたゲーム作りができたと考える。視覚障がいスポーツは3次元のものを2次元に変換したものが多いが、その形にのっとった非常に理にかなったスポーツではないかと感じた。

3. 成果と課題

研究の成果は、①実習校におけるブラインドサッカーの導入、②運動を要素毎に分解しての指導、③試合形式の取り組みを取り入れるためのアイデア（フロアサッカーの導入）、④授業の流れにおける改善、の4点に集約できた。①実習校におけるブラインドサッカーの導入については、実習校では、これまで、ブランドサッカーは授業として取り入れていなかった。それは、環境面で危険であったり、生徒の実態を考え、試合をするには難易度が高かったり等の理由から取り入れられていなかった。しかし、ブランドサッカーを通して、試合形式まではできなくても、蹴る動作を含む基礎的な運動を取り入れることができたと評価された。②運動を要素毎に分解しての指導については、「フロアバレー」での運動要素ごとに分解した評価データをもとに生徒の実態を細かく把握し、同じ傾向を持つ運動を理解した上で「フロアサッカー」での指導に取り組んだ。つまり「フロアサッカー」では、蹴る動作を指導する際には、まずは、「フロアバレー」の時のようにボールの正面に入り、手で打つ動作が、足に代わるだけという表現で指導を行うことで、生徒は理解が早くなり、吸収スピードも速くなった。③試合形式の取り組みを取り入れるためのフロアサッカーの導入については、やはり、サッカー的な要素を取り入れた試合ができればということで指導教員のアイデアからフロアバレーとブランドサッカーを組み合わせた「フロアサッカー」を生み出すことができた。試合形式で楽しむことができたこと、運動量的にもフロアバレーよりも運動量がおおいかもしれないと評価されたこと、重複障がいの児童生徒にも取り組めるスポーツとして今後の期待されること、手を出すよりも足を出す方が恐怖心が少なく、反射的に反応することができるなど、様々な利点も挙げられた。④授業の流れにおける改善については、個人の課題に取り組む時間を取り入れる工夫を行った。毎時間に見つけた個人の課題をフィードバックし、次の授業時に改善に取り組む時間を設けることで、個人のスキルアップも達成しつつ全体のレベル向上もできたと考える。

今後の課題としては、授業時間内の評価の時間確保や、より多くの評価者で評価するための効果的な方法の検討が挙げられた。